

韓国語の音韻体系を応用した日本語促音の 発音指導

姜蓮華*

(e-mail: juksu1809@hotmail.com)

目次

1. はじめに
 2. 先行研究
 3. 実験
 4. 実験結果
 5. 考察
 6. 結論
 7. 今後の課題
-

1. はじめに

韓国人日本語学習者 (non-native speaker、以下NNS) が、日本語の特殊拍¹⁾の知覚と生成に困難を感じることはよく知られている。しかし、韓国における日本語教育の現状を調査して何より驚かされたことは、学習者の殆どが体系的な音声教育を経験していないことである。また、このような背景から発音教育に対するニーズは高まっており、中でも特殊拍の「促音」の知覚と生成に現れる問題点と誤用の傾向に関する研究が数多く、福居 (1978)、戸田 (1997、1998、2003、2007)、関 (1987、2000b、2000 d、2007) らによって指摘されてきた。しかし、実際に現場で活用できる音声指導法に関する研究となると数少ない。

本研究は、この問題状況を基点としてNNSが日本語を生成する際に誤用が多く見られ

* 大田大学校、時間講師、言語教育学

1) 促音、長音、撥音

る特殊音素の促音に対して考察し、実際の日本語教育現場への応用を模索するものである。

まず、促音の生成における学習者の誤用の傾向と特徴を調べる。次に、音声指導法に注目し、考察を行う。その一つの段階として、金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』では韓国人日本語学習者が困難とする発音を項目別に分けて指導法を提示しているが、促音の指導法を用いて指導と練習を行い、効果を明らかにする。

最終的に、姜（2011）で行ったヴェルボトナル法（Verbo-Tonal Method）²⁾による指導と効果を比較検証することにより、日本語教育現場で活用できる、より効果的な指導法を探り出すことを目的とする。

2. 先行研究

日本語の促音に関して鹿島（2002）は、促音は後続子音によって五つの異なった音価 [p, t, k, s, ʃ] として実現されるが、音声的には子音の後続部に相当するものであると述べている。

促音の鍵となる持続時間を先行母音と後続子音環境によって分析した研究の中で、李（1996）は、初級の韓国人日本語学習者を対象にした調査の結果、促音語に誤りが多く、その理由は促音の一拍分の長さを持続しないからであると報告している。

関（2000b）では、韓国人学習者の促音挿入の誤りは、先行母音が狭母音の場合、語中の無声破裂音に頻繁に起こり、韓国人学習者は、日本語の語中無声破裂音の有声化を避けるため、語中の無声破裂を強く発音することに原因があると指摘している。

また、関（2000d）では、朗読資料を用いて実験を行った結果、先行母音が前舌狭母音の場合、全体の72%を示し、先行子音が[e]、後続子音が無声歯茎破裂音/t/である場合に促音の挿入が多いと報告している。

酒井（2006）は、上級の韓国人日本語学習者15名を対象に調査を行った結果、促音の脱落の誤りが9%で、促音挿入の誤りが38%であり、後続子音が[p][t][k]の場合、多く見られたと報告している。

促音の知覚・生成と母語の影響に関して、戸田（2001）は、NNSが母語干渉による有声音化現象を避けるために、有声音化しない激音や濃音で語中無声破裂音を代用するが、日本人の聴覚印象では、呼気が強いと厳しい口調に聞こえたり、喉頭緊張を伴うと

2) ヴェルボトナル法（Verbo Tonal Method）は、言調聴覚論の応用分野で、VT法、ヴェルボ・トナルメソッドとも呼ばれる。クロアチアのベタル・グベリナによって研究開発された聴覚・言語障害者及び外国語学習者の発音指導・矯正・そして補聴器のフィッティングなどに応用される。小坪博子外（2002）『VTS入門』p17.

促音が挿入されたように知覚されたりして、誤解を招く恐れがあると報告している。また、戸田（2003）では、日本語学習者が特殊拍を習得するときに困難を感じる理由の一つとして、母語と日本語の音韻構造の相違を指摘している。

姜（2004）は、韓国人日本語学習者初級と中級各15名を対象に聴覚実験を行い、日本語の促音を学習者が母語のどの音で代用しているかを調査した結果、後続子音、三音節語の第二音節の子音は韓国語の濃音で聞き取る場合が顕著に多いと報告している。次、発音指導法を用いて指導を行い、指導法の効果を検証した研究は数すくないが、大田（2003）は、中国人学習者にVT法を用いて促音を指導した結果、従来の指導法より持続時間の割合が大きくなった被験者数の結果から従来の指導法と比べ、VT法による指導法がより効果的であることを明らかにした。

姜（2011）は、韓国人日本語学習者初級と中級各10人を対象に振動器³⁾と身体リズム運動⁴⁾を用いて指導と練習を行い、指導後の持続時間の長さが日本語母語話者に近接していると述べている。

以上のように、先行母音と後続子音、特に持続時間の長さが促音の知覚と生成に大きな影響を与えることが分かる。しかし、従来の研究は後続子音が破裂音の[p][t][k]に限り調査が行われ、後続子音が摩擦音と摩擦音の場合は言及していない。また、発音指導のための音声教材が数多く出版されているにも関わらず、実践指導による効果を検証した研究は少ない。

それゆえ、本研究はNNSにおける発音指導前後の後続子音環境全てにおける持続時間の変化と指導の効果に重点をおいて考察を行う。

指導法としては、金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』⁵⁾が提示している促音指導を用いることにした。

3. 実験

3) 音声は振動としても知覚されるという考え方に基づいて、音声を機械的な振動に変換し、聴取、生成できるように考案されたものが振動器（オシレータ）及び振動器である。小坪博子外（2002）『VTS入門』pp 36～37。

4) 身体リズム運動（Body Movement）は、言語の生理的発生に基づいて組織されたものである。音声言語を正しく聴き取り、構音できるように、音声的特徴と身体の動きの要素を関連づけて作り出された運動。『VTS入門』p67。

5) 音声教材としては、金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』、戸田（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』、柳京子（2005）『韓国人のための発音練習』など、数多く出版されているが、母語の音韻体系を応用した発音指導の効果を検証するため、この教材を採択した。

3.1 実験の概要

実験は、東京在住のNNS20人を調査協力者⁶⁾として2種類（発音1、2）のテストを行った。

まず、促音を含む・含まないで共に有意味語・または無意味語となる日本語の単語30対（60単語）を選び、表1の順で「発音テスト」の原稿を作成する。さらに発音テスト1と発音テスト2の順で、韓国人初級学習者（Korean-Low Level Learner、以下KLLと略記）10人、韓国人中級学習者（Korean-Middle Level Learner、以下KMLと略記）10人に2つの実験を行った。また、NNSとの比較のために東京出身の日本語母語話者（native speaker、以下NSと略記）10人に同じ原稿を読んでもらい録音した。

3.2 調査内容

同じくNNSと言っても初級者と上級者とは外国語である日本語--ここでは促音--に関して、その生成に際して誤用の傾向は異なるし、音声指導による効果も相違すると推測される。そこでNNSとNSの促音の生成における、持続時間の相違点と、学習歴による傾向を調べる。また、韓国語の音韻体系を応用した指導と練習を行い、指導前後の促音の持続時間をNSの持続時間と比較することで指導法の効果を明らかにする。

3.3 調査協力者

日本在住の韓国人NNS、初級（KLL）10人、中級（KML）10人。初級は全員日本語学校生で、日本語学習歴2～10ヵ月（平均6ヶ月）、中級は1年3か月～2年6ヶ月：平均1年8ヶ月）、日本語母語話者（NS）10人（東京出身）に協力してもらった。

3.4 方法

3.4.1 音声資料（テスト材料）の作成

アクセント型が、平板型・頭高型で後続子音が破裂音の[p][t][k]、破擦音の[ts][tʃ]、摩擦音[s]となる促音語と非促音語（意味語と無意味語）のミニマル・ペア30対を選び、60単語をランダムに並べて発音テストの原稿を作成した。

6) レベル分けは日本語能力試験認定基準により、初級（日本語能力試験4級：日本語を150時間程度学習、日本語能力試験3級：日本語を300時間程度学習）と中級（日本語能力試験2級：日本語を600時間程度学習）にした。

＜表1＞ 促音の生成を調べるテストの使用単語

1	かって	16	せき	31	せち	46	いて
2	りか	17	こっち	32	すっばい	47	ひっし
3	さっち	18	むつり	33	かて	48	かこ
4	いつう	19	こっし	34	しち	49	てっぴ
5	てび	20	いけん	35	いっつう	50	せっき
6	かっこ	21	しっち	36	しと	51	おと
7	せつつく	22	そぼ	37	いっけん	52	りっち
8	ふし	23	しと	38	さち	53	せつつ
9	かっぼ	24	いそ	39	こっつ	54	すばい
10	りち	25	かぼ	40	さし	55	こき
11	さっし	26	こち	41	そっぼ	56	せっち
12	いび	27	さっつ	42	りっか	57	ぶっし
13	せっと	28	ひし	43	むっつり	58	おっと
14	こつ	29	せと	44	さつ	59	こし
15	いっそ	30	こっき	45	てっぴ	60	いって

3.4.2 テストの実験方法

発音テスト1は、韓国人日本語学習者KLL10人とKML10人に何の情報も与えず、音声資料を配布して一回ずつ読んでもらい、録音した。

発音テスト2は、金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』の韓国語の音韻体系を応用した指導法⁷⁾（20分）を用いた指導と練習の後、発音テスト1と同じく、音声資料を配布して一回ずつ読んでもらい、録音した。

最後に、Native Speaker NSとNon-Native Speaker NNSにおける促音の持続時間の相違を比較するために東京出身のNS10人に同じ発音テストの原稿を配布して録音してもらった。録音は（SONY-TCM）テープレコーダーと単一方向性マイク（SONY ECM-MS907）を使用した。

3.4.3 指導内容

発音テスト2⁸⁾は、韓国語の音韻体系を応用した指導法による指導と練習を行った場

7) 金・尾崎（1999）の説明によると、「ㄹㅇ」という会社の名前は「ロッテ」だが、この「ロッテ」という日本語の発音を真似するためには韓国語の表記としては非用であるが、「ㄹㅇ」のように表記するのが日本語に近い発音をするのに役に立つ。従って[って=ㄹㅇ] [った=ㄹㅇ]のようにして、「て」・「た」は激音で認識すると両方の発音の差が明確に区別できる。言い換えれば、対照練習の「きています」の「きて」は「ㄱㅇ」で、「きています」の「きて」は「ㄱㅇ」のように認識しておいた方がいいであろう。ただし、「きて」は3拍、「きて」は2拍であることを忘れてはいけない。「て」・「た」は激音で発音するが、柔らかく発音するように注意しなければいけないと促音を発音する要領を提示している。

金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』p32。（筆者訳）

合、どのような効果がみられるかを明らかにするために行った。

指導と練習は、金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』に従い、促音の指導法を用いて行った。まず、日本語の促音と非促音の特徴と、日本語の清音は韓国語の激音あるいは濃音ではないことに関して説明した。⁹⁾次に、韓国語のハングル表記付きのシートを見せて説明し、指導と練習を各10分行った後、発音テスト2を（発音テスト1と同じ内容で順番が異なる）を初級と中級各10人に配布して1回ずつ発音してもらい、録音した。指導内容の詳細は次の通りである。

【母語を応用した練習の説明と内容】

- これは 金照雄・尾崎達治（1999）『韓国人のための発音クリニック』から引用した練習法です。
- この本には韓国人学習者が間違いやすい発音を項目別に分類して、効果的な練習法を提案しています。その中で促音を練習します。
- 資料①をよく見てください。
- 表記としては正しくありませんが、この通りに練習しましょう。
- 促音の場合、第一音節末のパッチムをはっきり発音してください。
また、第二音節は濃音、激音ではなく、平音で発音してください。
- 非促音語の場合、第二音節を濃音ではなく、激音で発音してください。
- 私が読んでみますので、よく聞いてください。
- 筆者が読みながら指導する。（10分）
 - ・まず、資料①の単語を筆者が2回読んで学習者に聞かせる。
 - ・次に、資料①の単語を筆者が一個ずつ読んで、学習者にリピートさせる。
 - ・繰り返して指導する。
- 学習者に練習させる。（10分）
 - ・学習者が自分で資料①の単語を練習する。
 - ・筆者は一人ずつ回って矯正・指導する。

8) 指導法の効果を検証するには指導前後に一定期間をおいて実施した方がより信憑性の高い結果が得られると思われるが、協力者の様々な状況などを考慮してテスト1の1時間後にテスト2を行った。1時間は、学校の生活とアルバイトなど、留学生活に関する話をする事で指導と練習のことを学習者の記憶から排除した。

9) 韓国語の子音は、平音・激音・濃音の三つの対立をなしており、平音は少々の息を、激音は多量の息を伴う。濃音は息を伴わない音で喉頭の緊張を伴う。例えば、お月様：달[tal]、仮面：탈[thal]、娘：딸[tal]のように意味も変わる。

【母語を応用した発音練習の資料】

資料①							
지칸		꺄칸		고키		꺄기	
1. じかん	—	じっかん		2. こき	—	こっき	
가코		꺄고		리카		꺄가	
3. かこ	—	かっこ		4. りか	—	りっか	
스파이		꺄바이		가테		꺄테	
5. スパイ	—	すっばい		6. かて	—	かって	
오토		꺄도		이치		꺄지	
7. おと	—	おっと		8. いち	—	いっち	
이테		꺄테		기테		꺄테	
9. いて	—	いって		10. きて	—	きって	

3.4.4 分析方法

発音テストデータの分析は、NSとNNSの発音を録音した音声資料を音声ソフトSUGI Speech Analyzerにかけ、持続時間を測った。10)

持続時間は、学習者によって発話の速度が違いため長さの絶対値では比較出来ないの
で、単語の全体持続時間における無音区間の持続時間の割合で示した。

日本語母語話者（NNS）との比較によって指導前後の効果を検証するため、有意性
検定は独立標本 t 検定を用いた。

4. 実験結果

4.1 発音テスト1

<表2> 発話者と後続子音別にみた発音テスト1の持続時間の割合（単位：％）

後続子音	[p]	[t]	[k]	[ts]	[tc]	[s]	[e]
NS	47	46	45	41	39	45	46
初級	41	45	38	38	34	36	34
中級	45	45	40	38	39	43	39

10) 後続子音が摩擦音の場合は発話と同時に摩擦が起こり、無音区間の測定が難しい。摩擦音は音声波形と広帯域スペクトログラム（/s/ではノイズが比較的高い部分に観察される）を比較して測定した。

<表2>は、初級KLLと中級KMLの後続子音環境別における発音テスト1の持続時間の割合を示したものである。

NSの後続子音環境別の持続時間の割合は、[p]47%、[t]46%、[e]46%、[k]45%、[s]45%、[ts]41%、[tɕ]39%で、後続子音が破裂音[p]の場合一番長く、破擦音[tɕ]の場合が一番短かった。

初級は、[t]45%、[p]41%、[k]38%、[ts]38%、[s]36%、[tɕ]34%、[e]34%で後続子音が破裂音[t]の場合に一番長く、破擦音[tɕ]と摩擦音[e]の場合、短かった。

初級の場合、[p][t][k][ts][tɕ][s][e]全ての後続子音の割合はNSより短いのが分かる。

中級では、[p]45%、[t]45%、[s]43%、[k]40%、[tɕ]39%、[e]39%、[ts]38%となり、後続子音が破裂音[p][t]の場合に一番長く、破擦音[ts]の場合に一番短かった。

中級の場合も、後続子音環境[tɕ]以外の [p][t][k][ts][s][e]の持続時間はNSより短いことが分かった。

以上のように初級・中級共にNSより持続時間が短い傾向が現れた。また、NSとの持続時間の差は初級の方が中級より大きいことが分かった。

NSとの持続時間の差は摩擦音である[e]の場合に初級12%、中級7%で顕著に大きかった。

4.2 発音テスト2

<表3> 発話者と後続子音別にみた発音テスト2の持続時間の割合（単位：%）

後続子音	[p]	[t]	[k]	[ts]	[tɕ]	[s]	[e]
NS	47	46	45	41	39	45	46
初級	46	48	42	46	38	39	40
中級	49	48	43	40	39	40	35

<表3>は、初級KLLと中級KMLの後続子音環境別における発音テスト2の持続時間の割合を示したものである。

NSの後続子音環境別の持続時間の割合は、[p]47%、[t]46%、[e]46%、[k]45%、[s]45%、[ts]41%、[tɕ]39%で、後続子音が破裂音[p]の場合一番長く、破擦音[tɕ]の場合が一番短かった。

初級では、[t]48%、[p]46%、[ts]46%、[k]42%、[e]40%、[s]39%、[tɕ]38%であり、後続子音が破裂音[t]の場合一番長く、破擦音[tɕ]の場合、一番短かった。

初級の場合、後続子音が[t][ts]のとき持続時間割合はNSより長く、後続子音が[p][k][tɕ][s][e]のときNSより短いことが分かった。

中級では、[p]49%、[t]48%、[k]43%、[ts]40%、[s]40%、[tɕ]39%、[e]35%で

あり、後続子音が破裂音[p]の場合一番長く、摩擦音[ɕ]の場合、一番短かった。

中級の場合、後続子音が[ɕ]のとき持続時間の割合はNSと同じであり、後続子音が[p][t]の場合はNSより長い、後続子音[k][ts][s][ɕ]における持続時間割合はNSより短かった。

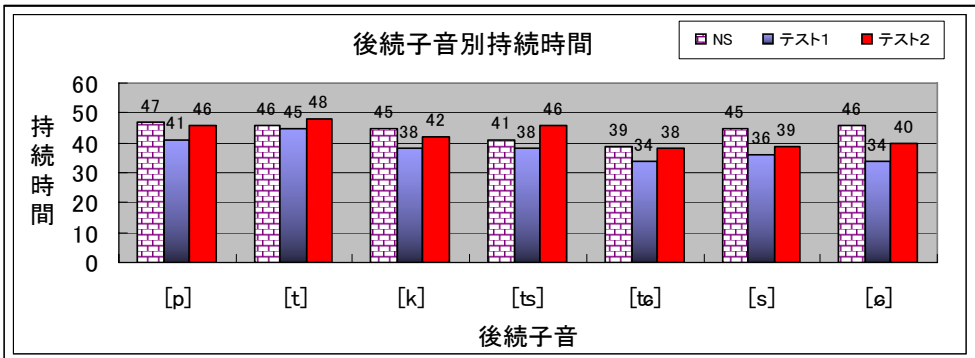
以上のように、指導と練習の後も初級・中級共にNSより持続時間が短い傾向が残り、NSとの持続時間の差は初級では、摩擦音である[s][ɕ]の場合に6%、中級では、摩擦音[ɕ]の場合に11%で大きかった。また、初級では後続子音環境[t][ts]、中級では[p][t]においてNSより持続時間が長くなる特徴が現れた。

NSとの持続時間の差は発音テスト1と同じく初級の方が中級より大きかった。

4.3 指導前後（発音テスト1と2）の比較

金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』の韓国語の音韻体系を応用した指導法による指導と練習を行った初級学習者（KLL）と中級学習者（KML）の発音テスト1と発音テスト2を日本語母語話者（NS）と比較した結果を以下に述べる。

4.3.1 初級学習者



<図1> 初級学習者KLLの後続子音別にみた発音テスト1と2の持続時間の割合

<図1>に見られるように、初級KLLは後続子音が[p]の場合、NSの平均持続時間47%に対して発音テスト1の41%→発音テスト2では46%(NSとの差6→1)、[t]の場合はNSの46%に対して45%→48%(1→+2)¹¹⁾、[k]の場合はNSの45%に対して38%→42%(7→3)、[ts]の場合、NSの41%に対して38%→46%(3→+5)、[tɕ]場合はNS39%に対して34%→38%(5→1)、[s]の場合はNSの45%に対して36%→39%(9→6)、[ɕ]の場合はNSの46%に対して34%→40%(12→6)であった。

初級の場合、指導前は平均持続時間がNSとかなりズレていたが、指導後は後続子音環境[t][ts] 以外の[p][k][tɕ][s][ɕ]において平均持続時間がNSの平均持続時間に近づいたことが認められる。また、指導前にNSとの持続時間の差が一番大きかった後続子音[ɕ]

11) (+)は、日本語母語話者の持続時間より長くなったことを意味する。

の場合、指導後（12→6）に改善されたことが分かった。

〈表4〉NSと NNS初級学習者の発音テスト1と2の統計的有意性検定結果（ $p < 0.05$ ）

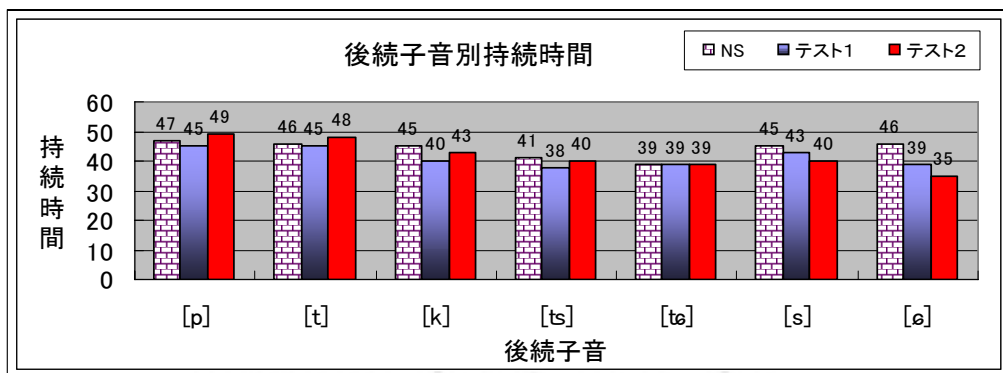
発音	テスト 1		テスト 2	
	T値	P値	T値	P値
[p]	-2.103	0.056	0.364	0.722
[t]	-0.640	0.533	0.627	0.542
[k]	-2.335	0.036 *	-0.728	0.479
[ts]	-0.781	0.449	1.084	0.298
[tɕ]	-1.539	0.148	-0.328	0.748
[s]	-3.282	0.006 *	-2.108	0.061
[ɕ]	-3.323	0.004 *	-2.123	0.058

* T値：統計量、P値：有意確率

〈表4〉は、初級学習者の指導前後の結果を日本人母語話者（NS）と比較した統計的な有意性の検定結果である。指導前は後続子音環境[k][s][ɕ]がNSの発音と統計的に有意差があり($p < 0.05$)、[p]はpの値が0.05よりは大きい、その差がほとんどなく、有意差はないと言える。他の子音環境ではNSと有意差はなかった($p > 0.05$)。

一方、指導後は全ての子音環境においてNNSと有意差はなく($p > 0.05$)、指導前に有意差がなかった発音の結果も[ts]以外の子音環境でpの値が大きくなったことから効果を確認することができた。したがって、初級学習者の場合、指導と練習の効果があったと言えるだろう。

4.3.2 中級学習者



〈図2〉 中級学習者KMLの後続子音別にみた発音テスト1と2の持続時間の割合

＜図2＞にみるように、中級では後続子音が[p]の場合、NSの平均持続時間割合47%に対して発音テスト1の45%→発音テスト2では49%(NSとの差2→+2)、[t]の場合はNSの46%に対して45%→48%(1→+2)、[k]の場合はNSの45%に対して40%→43%(5→2)、[ts]の場合はNSの41%に対して38%→40%(3→1)、[tɕ]の場合はNSの39%に対して39%→39%(0→0)、[s]の場合NSの45%に対して43%→40%(2→5)、[ɕ]の場合NSの46%に対して39%→35%(7→11)であった。

中級では、指導と練習を行った後、後続子音[k][ts]の場合に平均持続時間がNSの平均持続時間に近づいていることが分かる。また、指導前にNSとの持続時間の差が一番大きかった後続子音環境[ɕ]の場合、指導後（7→11）により大きくなったことが分かった。

＜表5＞NSとNNS中級学習者の発音テスト1と2の統計的有意性検定結果 (p* < 0.05)

発音	テスト 1		テスト 2	
	T値	P値	T値	P値
[p]	-0.749	0.467	0.605	0.555
[t]	-0.243	0.812	1.036	0.319
[k]	-2.423	0.031*	-0.687	0.504
[ts]	-0.749	0.467	-0.220	0.830
[tɕ]	-0.459	0.654	0.231	0.821
[s]	-0.732	0.562	-2.434	0.798
[ɕ]	-2.436	0.027*	-3.493	0.002*

* T値：統計量、P値：有意確率

＜表5＞は、中級学習者の指導前後の結果を日本人母語話者（NS）と比較した統計的な有意性の検定結果である。指導前は後続子音環境[k]と[ɕ]がNSと統計的に有意差があり(p<0.05)、他の子音環境ではNSとの有意差はなかった(p>0.05)。

指導後は、子音環境[ɕ]の場合にNSとの有意差があり(p<0.05)、他の子音環境ではNSとの有意差はなかった(p>0.05)。その他、指導前に有意差がなかった子音環境[t]以外は、pの値が大きくなったことからNSの持続時間に近接したことが確認できた。したがって、中級学習者の場合も初級学習者と同じく、指導と練習の効果があったと言えるだろう。

5. 考察

5.1 発音テスト 1

発音テスト 1 は、日本語の音韻体系に対して体系的な学習経験のない学習者が、促音語と非促音語を生成する際の音声の特徴と誤りの傾向を調べるために行ったものである。

後続子音別にみた NS の持続時間の割合は、[p]47%、[t]46%、[c]46%、[k]45%、[s]45%、[ts]41%、[tc]39% であり、後続子音が破裂音 [p] の場合は長く、破擦音 [tc] の場合、短かった。

初級では後続子音が破裂音 [t] のとき 45% で長く、破擦音 [tc] と [c] のとき 34% で短かった。初級の場合、全ての子音環境において持続時間が NS より短いことが分かった。また、NS との持続時間の差が大きかった子音環境は [c] (12%) であった。

中級の場合は、後続子音が [p][t] で 45% と長く、[ts] のときは 38% で短かった。後続子音 [tc] は NS の持続時間と同じく、他の子音環境において NS より短いことが分かった。

NS との持続時間の差が大きかった子音環境は初級と同じく、[c] (7%) のときであった。

このように同じ言語の背景を持っていてもレベルによって生成する方が多少違う（子音環境別の持続時間の長短）のは学習者が持っている知識、母語干渉、¹²⁾ 中間言語的な要因が働いているからであろう。

また、初級・中級共に破裂音 [t] で長く、摩擦音 [c] で短い傾向が現れたが、摩擦音の場合は発話と同時に摩擦がおこり、無音区間が存在しないため、学習者が正しい持続時間を保つことが困難であると思われる。また、音声ソフトによる測定の際にも影響されたと考えられる。

両群共に後続子音環境別の持続時間が NS より短かったが、中級の場合がより NS の持続時間に近接していた。

Major (1987) ¹³⁾ が発達過程の初級段階では母語の干渉が優勢で、徐々に少なくなっていくと説明しているが、これを裏付けるものと考えられる。

12) 言語の学習上ある言語が別の言語の学習に与える影響のうち、目標言語において誤用や不適切な使用につながるような母語の使用を言う。対象分析仮説では、学習者の誤用の原因が全て言語干渉に基づくものと考えられていたが、誤用分析研究や中間言語研究では負の転移の様々な原因の一つに過ぎないと主張された。

池上麻希子外 (1998) 『日本語教育重要用語 1000』 p30.

13) Major (1987) は、学習者の中間言語発達過程を、母語干渉と発達上のプロセス (developmental processes) からの影響力の変化から説明している。このモデルによると習得の初期段階では母語転移が優勢するが、時間が経つにつれて発達プロセスが優勢になると述べている。

5.3 指導法の効果

本実験を通して韓国語の音韻体系を応用した指導法による指導と練習により、学習者によって多少の違いはあるものの、発音が改善されたことが明らかになった。t 検定による有意性検証からも明らかである。

特に、実験の結果からも分かるように、初級学習者の場合、矯正にかなりの効果があることが分かった。この結果は初級段階での発音指導が重要であることを示唆するものである。

韓国語の音韻体系を応用した指導法の長所は、韓国語を応用しているので韓国人学習者に理解面で早いと思われる。短所としては自己フィードバックができないことであることが分かった。¹⁵⁾

6. 結論

本研究は、特殊拍の中でも誤りが多発する日本語の特殊音素の促音の生成に見られる誤用の特徴と傾向を明らかにすると同時に指導法の効果を検証することを目的として、韓国語の音韻体系を応用した指導と練習を行い、以下のことが明らかとなった。

促音の生成における持続時間は、韓国人日本語学習者 (NNS) 初級・中級共に後続子音環境によって多少の差はあったが、日本語母語話者 (NS) より短いことが分かった。

後続子音環境別の持続時間は、破裂音の場合に長く、摩擦音の場合に短い傾向が強かった。

学習レベル別にみた場合、初級・中級両方とも日本語母語話者より短かったが、中級の場合がよりNSの持続時間に近接していた。

次に、韓国語の音韻体系を応用した指導法の効果を調べた結果、初級・中級共に、指導の前の発音テスト 1 では、NNSの持続時間がNSの持続時間より短い傾向が強く見られたが、指導と練習を行った後は子音環境によって多少の違いはあるが、NSとの持続時間に近接していること、t 検定による有意性検証の結果から韓国語の音韻体系を応用した指導法による指導と練習が効果的であることは明らかであろう。

この結果からも分かるように、日本語と韓国語は似ているが、実際に音韻体系は違うということをまず、教師が意識して学習者の母語の音韻体系を理解した上で両言語の相違点を学習者に意識させることが重要であると考えられる。

15) 実験後のアンケート調査で、思うように発音できない、正しく発音しているの自信がないなど、学習者の意見を参考にした。

また、学習者の発音の問題点により適合した指導法が求められる。学習者が積極的に発音矯正に参加できるように授業の雰囲気を作ること、様々な学習者に対応できる指導法を工夫することが教師の大きな課題であると思われる。

7. 今後の課題

近年、コミュニケーションを中心とした音声教育が注目されており、戸田（2004）は、意味と文脈を重視したコミュニケーション活動の中で発音指導を実践することを提案している。

また、木村（2001）は、言語習得はプロソディ、特にリズム・イントネーションの獲得から始まり、リズム・イントネーションは、音声全体を一つにまとめる役割を担っているため単音の調音法を学習しても「～語らしさ」は習得できなく、リズム・イントネーションの習得を優先すれば、単音の指導・矯正も容易になると述べている。

本調査では、単語レベルに限って行ったが、文レベルの実験を行い、リズムの習得が発音矯正に与える効果を明らかにしたい。

本研究では、主に横断研究の方法を用いたが、今後は様々な音声指導法を用いて持続的な指導と練習を行った場合、どのような効果が現れるかをみるため、縦断研究を取り入れて研究を進めたい。

最後に、韓国人日本語学習者が困難を感じている長音、清音と濁音、ザ行、アクセント、イントネーションなどの音声項目に関して活発に実験を行い、多様でかつ適合した音声指導法を探り出すと同時に、音声教材を作成して日本語教育現場に活用していきたい。

【参考文献】

- 李明姫（1996）「韓国における日本語初級過程学生の聴音能力と発音能力の実態調査」『国語学研究』26、東北大学文学部、pp.38-48
- 池上麻希子外（1998）『日本語教育重要用語1000』バベル・プレス
- 大田真（2003）「中国語母語話者における促音の指導法についての考察－VT法と従来の発音指導を比較して－」『拓殖大学言語教育研究』第3巻 pp.79-86
- 鹿島央（2002）『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク

- 姜蓮華 (2004) 「韓国人日本語学習者の日本語音声の知覚に関する一考察－特殊音素の促音を中心に－」 『早稲田大学日本語教育研究』 第5号 pp.45-59
- _____ (2011) 「振動器と身体リズム運動による発音指導－特殊音素の促音を中心に－」 『日本文化学報』 第51輯 pp.39-55
- 木村政康 (2001) 「音声教育法－VT法の理論を応用して－」 拓殖大学言語文化研究所 『言語とコミュニケーション』 pp.45-64
- 金照雄・尾崎達治 (1999) 『韓国人のための発音クリニック』 時事日本語社
- 小坏博子・木村正康・川口義一・安富雄平 (2002) 『聴覚・言語障害教育および外国語教育のためのVTS入門』 特定非営利活動法人グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会
- 酒井真弓 (2006) 「韓国人学習者の日本語音声に関する研究－誤用調査と音声分析を中心として」 韓国外国語大学博士学位論文、韓国外国語大学大学院日語日文学科
- 戸田貴子 (1997) 「日本語学習者による促音・長音生成のストラテジー」 『第二言語としての日本語の習得研究』 第1号 凡人社 pp.157-197
- _____ (1998) 「日本語学習者による促音・長音・撥音の知覚範疇化」 『文芸言語研究』 言語篇 第33号 筑波大学文芸・言語学系 pp.65-82
- _____ (2001) 「日本語音声習得の展望」 『第二言語としての習得研究』 4号 第二言語習得研究会 pp.150-168
- _____ (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」 『音声研究』 第7巻第2号 pp.70-83
- _____ (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク
- _____ (2007) 「日本語教育における促音の問題」 第11巻第1号 pp.35-46
- 福居誠二 (1978) 「日本語の閉鎖音の延長・短縮による促音・非促音としての聴取」 『音声学会会報』 159 pp.9-12
- 関光準 (1987) 「韓国人の日本語の促音の知覚について」 『日本語教育』 62号 pp.179-193
- _____ (2000b) 「日本語音声教育研究の現状と問題」 『日本語学シリーズ1日本語の現状と問題』 宝庫社 pp.7-48
- _____ (2000d) 「韓国人学習者の日本語発音に見られる促音挿入の現象」 『日本文化研究』 9、韓国日本文化学会 pp.63-80
- _____ (2007) 「韓国人日本語学習者の発話に見られる促音挿入の生起要因」 『音声研究』 第11巻第1号 pp.58-70
- 柳京子 (2005) 『韓国人のための発音練習』 J&C
- Major, R.C. 1987.A model for interlanguage phonology.In Ioup, G.and Weinberger, S.H.(eds.), pp.101-124

要 旨

韓国人日本語学習者の特殊拍の知覚と生成に現れる問題点は以前から数多く指摘されてきたが、実際に現場で活用できる指導法に関する研究は少ない。

本研究はこの問題状況を基点とし、韓国人日本語学習者の初級と中級各10名を対象として促音の生成に見られる特徴と誤りの傾向を調べた。さらに、音声指導法の効果を検証することを目的として、金・尾崎（1999）『韓国人のための発音クリニック』で提案している韓国語の音韻体系を応用した指導法を利用した指導法による指導と練習の効果を検討するために実験を行い、以下のことが明らかとなった。

促音の持続時間の長さを初級・中級学習者と日本語母語話者を比べると、中級の場合は日本語母語話者の持続時間より近づいているが、初級・中級共に後続子音環境全体において日本語母語話者より持続時間が短い傾向が強かった。

韓国語の音韻体系を応用した指導法による指導と練習後の発音テスト結果は、学習者により多少違いはあるが、初級・中級両方とも促音の持続時間が日本語母語話者の持続時間に近接しており、効果が確認できた。しかし、後続子音環境によって韓国人日本語学習者の持続時間が日本語母語話者より長くなる特徴が現れた。

韓国語の音韻体系を応用した指導法の長所は韓国語を応用しているので韓国人学習者に理解面で速いと思われるが、その長所が逆に短所になる可能性がある。

日本語と韓国語は似ているが、実際に音韻体系は違うということをまず、講師が意識して学習者の母語の音韻体系を理解した上で両言語の相違点を学習者に意識させることが重要であると思われる。

キーワード：促音、生成、持続時間、子音環境、音韻体系、発音指導

투 고 : 2012. 8. 31
1차 심사 : 2012. 9. 15
2차 심사 : 2012. 10. 6